

Title	羽後飛鳥圖誌(早川孝太郎著, 郷土研究社發行)/與那國島圖誌(本山桂川著, 郷土研究社發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.1 (1926. 3) ,p.149- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260300-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るものと云ひ、民間信仰史の一資料である。

鎌の宮の大名(鹿島郡金丸村宿那彦神像石神社境内)——根元の
周圍一丈九尺九寸、樹高十五間にして、この樹の現存する處はも
と建御名方命を祭神とする鎌宮諏訪神社の境内に屬し居つたが、
現在は一の建物を殘さぬ。同神社の縁起に據ると、往古大己貴命
と少彦各命と當國に來り怪賊化鳥を平定し給ひし時に建御名方命
は彌柄鎌を以て草木を刈り、荒野を墾いて容易に其れを退治せら
れ、猶後難を慮つて大蛇湯(今の邑知湯)の畔なる洲端の地に鎮座
ましましたと云ふ。その洲端は即ち諏訪神社の地である。故に毎
年七月二十七日(現今は八月二十七日)古式の祭典を執行して、長
一尺餘の鎌二挺に、新稻穂及び白木綿を添へて奉獻し、式後其の
鎌を神木なるこの大楠に打ち込むのを例とし、又此の祭日には遠
近の庶民來集して各鎌を同じく樹幹に加へて鎌舞と稱へて兩命の
妖魔退治の狀を模す。此等の鎌は今尙魚鱗の如く數百に達し、其
の古きものは既に癒合組織に包まれて大小の瘤を造り、成は癒合
の半ば生じて鎌の先端のみ現はれたるもの等種々あり、又參詣人
が賽錢を樹膚に打ち込みたるものもあつて同じく癒合組織により
小瘤を形ち造る。其の狀家に奇觀を呈と云ふ。然し現今は群衆の
鎌打を止め神職鎌一挺を清め稻穂を副へて神前に獻じ式後恭しく
これに打込むを例とする。此の宮は神殿なく、たゞ此のたぶの木
を以て御神體となすといふ。これは神木研究上興味ある資料の一
である。

猶此の外に記述しておき度いものもあるが、紙面の都合上これ
にて擧筆しておく。最後にこの調査を擔任せられた同縣調査囑托

書 評

安田作次郎氏の勞に對して多大の敬意を表し、且本書を寄贈せら
れたる同縣に對して、本會は深謝の意を表するものである。(大正
十四年九月十九日夜武田勝藏)

羽後飛鳥園誌(早川孝太郎著)
郷土研究社發行

與那國島園誌(本山桂川著)
郷土研究社發行

兩書とも爐邊叢書中の一冊である。一は北國の日本海中の孤島
であり、他は南島中の西端に位するもので、いづれも旅人の眼に
映じた島の姿である。遠く本土をはなれたわびしい島の生活には
文明の風に滅ぼされない多くの特異相がある。交通の便利をうけ
ないかはり特異のものをつくりだし、古いものを保存する。或時
には危険であり、ともしくもあり、單調であるなりはひを營みつ
く、海のあなたへ憧憬の胸をもやし、島に對する愛着に悶え、た
まに訪ひくる船人に心躍らす島人には、吾々の想像も許さない素
朴と純真とがある。従つて彼等の産業はもちろんのこと、その信
仰、傳説、歌謠、風俗、習慣の類は、民間傳承の研究者にとつて
特に興味あるものである。兩書はいづれもそれらに關する忠實な
る見聞録であつて、多くの圖版と寫真とをそへて讀者の理解と興
味とを助けてゐる。殊に南島のそれは、柳田國男先生の「海南小
記」における一編の哀詩とも稱すべき「與那國の女たち」の讀者を
して、一層のなつかしさをおぼえしめる。民間傳承や郷土の研究
家にとつてはもちろん、一般の讀者に對してもつきさる興味と知

議とを與へるであらう。(松本芳夫)

啓明會第十五回講演集 啓明會發行

面積から言へばわが國最小の縣に屬し、位置から言へば内地の西南北に位し、産業において至つて貧弱にして、政治的にも文化的にも從來甚しく閉鎖されたる琉球は、最近に至つてわが文化史的研究にとつての材料の寶庫として世の注意をひき、次第に南島研究が盛となり、有益なる著書の公刊されるのは誠に喜ばしきことである。本書はわが學界の保護獎勵に多大の貢獻をなしつつある啓明會が、昨年初秋東京において琉球藝術に關する展覽會を催し新たに南島に對する理解と憧憬とに一大刺戟を與へたその時の講演集である。内容は東恩納寛惇氏の琉球史概観、柳田國男氏の南島研究の現状、伊波普猷氏の古琉球の歌謠に就きて、鎌倉芳太郎氏の琉球美術工藝に就きて、伊東忠太氏の琉球藝術の性質、山内盛彬氏の琉球の音楽に就きての六講より成り、その講演者はいづれも南島研究の權威であるから、夫々に興味頗る深し、南島文化の研究に對して有益なる示唆を與ふるものである。(松本芳夫)

雜誌民族(民族發行所)

ひとしく過去の民族生活を知らうとする學問でも、各々その領域があり限界がある。従つて單なる一方面的研究のみでは決して民族生活の全體の真相を知ることができず、こゝに各方面を異に

した研究の協力を必要とするのである。しかるにあまりに分化したる現代の學問は、同一の目的に向へるものすら、その業績であつた。これはやむを得ないとは言ひながら、實に悲しむべきことであつたのである。しかるに今般柳田國夫先生を中心として生れたる「民族」は、名稱そのものとひとしく極めて包括的内容を有し、各方面の専門家の遺著を頼りたる研究論文を始めとして、民族生活に關する資料報告を網羅する一大雜誌であつて、その使命に關しては、「我々の手帳が此雜誌を通じて順次に國內同志の公有たらんとすること、即ちどこまでも現代の連絡にあることを編輯者はのべてゐる。従つて本誌は民族の研究者にとつて最も望ましき要求をみたさるるものである。創刊號には、石金兩時代の過渡期の研究に就いて(濱田耕作氏)、琉球語の母韻統計(伊波普猷氏)、十二支歌に就いて(新城新藏氏)、杖の成長した話(柳田國男氏)、太平洋諸島の巨石文化に就いて(鳥居龍藏氏)の論文其他、第二號には求婚傳説より羽衣、三輪山傳説(金田一京助氏)、二見江村の正月門飾(井上頼壽氏)、楊子を以て泉を下する事(柳田國男氏)、餓鬼阿彌蘇譚(折口信夫氏)、奥羽地方に於けるアイヌ族の大陸交通は既に先秦時代にあるか(喜田貞吉氏)の論文其他がある。かつて柳田先生の主宰したる「郷土研究」がわが學界に異常の刺戟を與へたるとひとしく、本誌もまた多大の貢獻をなすべきことを信じて疑はない。こゝに本誌の誕生を祝するとともに、將來の發展を祈る次第である。(松本芳夫)